

## 5 魔法にかかった騎士

つれなき <sup>うるわ</sup>麗しの妖精に眠らされた騎士が  
暮れゆく丘の麓の冬枯れの森に横たわっている  
そこに <sup>すき</sup>鋤の音が近づき 黒い影が流れ  
騎士を越え平原を <sup>よぎ</sup>過って行けど 騎士はじっと動かない

長い時を重ねて <sup>さび</sup>錆が綺麗な花園を創り出し 5  
<sup>よろいかぶと</sup>鎧兜に秋の野花を咲かせている  
<sup>しゃれ</sup>洒落た胸当てから鉄の籠手 <sup>こて</sup>にかけては蜘蛛の巣が張り  
まるで幻の <sup>たて</sup>盾を構えているかと思わせる

無数の足音が耳元の芝地を踏みしめるとき  
切れ目無く続く大軍が騎士の夢の中を行進し 10  
一人また一人と <sup>とも</sup>昔の味方が現れる  
一日中途切れることなく しかし 騎士は合図を送れない

静かな木立の中で一羽の鳥が鳴く  
久方ぶりのその鳴き声が消えると 騎士は立ち上がって  
後を追おうとする だが 冷たくなった手足は動かず 15  
芝地の上で身動きならず 騎士の影は横たわったまま

しかし <sup>ひとひら</sup>一片の枯れ葉が舞い  
騎士の顔に止まって張り付くと  
恐怖の冷たい生汗 <sup>なまあせ</sup>が額 <sup>にじ</sup>に滲む 今や 騎士は虚しくも  
胸押し潰さんとするその屈辱 <sup>おもし</sup>の重石を払わんとするのであった 20

(山中光義訳)